

「旧約聖書における教師・伝道者」

～トラー、知恵文学、知者の存在をめぐる考察～

宮 寄 薫

はじめに¹⁾

今回の教職セミナーの主題「福音の担い手：伝道者論をめぐる」に沿って、旧約聖書における福音の担い手あるいは教師／伝道者の存在と働きについて考察をしてみたい。旧約聖書とはキリスト教の新約聖書に対する名称であるが、ここではヘブライ語聖書を聖典／正典とするイスラエルの民あるいはユダヤ人に関する宗教的教育のありようをまず押さえた上で、今日のキリスト教会の教育あるいは伝道へと論点をつなげていくことをめざす。なお、特に断り書きのない場合、章句は聖書協会共同訳を用いた。

1. トラー

1) トラー（律法）＝教え

福音の担い手、教師、伝道者について考察してゆくにあたり、そのような人々が根本的に依拠しているものは何かをまず明確にしておきたい。旧約聖書では、トラーに相当する文書がそれである。トラーは五書（モーセ五書）とも呼ばれ、ヘブライ語聖書（タナク）の三分区：トラー（律法）、ネビーーム（預言者）、ケトゥービーム（諸書）の最初にして中心的な位置を占める。

トラー-תורהは、ヘブライ語動詞「ヤーラー」-יָרָה (qal射る、投げる；hifil教え

る)を語源とする女性名詞で、「律法」と訳されるが、もともとの意味は「教え」「指示」である。方向性を指し示し、その内容を教示する。つまり、トーラーは、本来、教育的意味を持つと言える。

トーラーという言葉の意味やその性質について、フランク・クリュゼマンとガブリエレ・オーブストの意義深い説明を紹介する。

「トーラーという言葉は、もともと親の教え、特に母親が子供に教えるもので、それによって子供は、生活の中で物事をわきまえなければならないのです(箴言6:20²⁾)。それからシナイにおける神の包括的教えを示す最も重要な名称になりました。それは一方で、神の唯一性や無像性、安息日、祭儀といった宗教的な根本原則を含み、他方では、同じく重要なこととして、よそ者や寡婦、孤児、貧窮者、すなわち社会的に最も弱い人々への保護規定を含みます。それはキリスト者にも拘束力のある方向づけを含み、内容的に、多く人権と関係する根本原則です。これに加えて、第三の固有の、法の本質のうちに存在すべき規則があります。イスラエルの刑法は、西洋で発展したローマ法と異なって、個々の犠牲者のための正義を求めています」³⁾

「トーラーは、神のよき賜物であって、人間に、神と共なる生活、共にある人との生活を可能にします。それは生活の教えであって、人間を、死に至る道から引き離します。しかめっ面の、偽善的な道徳の表現ではなく、現実の、包括的な生の喜びを提供します。それゆえこれを知らせることは、「福音」——喜びのおとずれです。これを知った人は、トーラーをただほめたたえるほかなく、彼にとってそれは、詩編の祈る人と同様、愛着であり、愛することへの律法なのです(詩編119:54,97参照)」⁴⁾

このような神の賜物、福音であるトーラーとどう向き合い、どう知らせてゆけばよいだろうか。

トーラーを、書かれたテキスト(教科書)と捉えるならば、これを用いて教

える者と、教えられる側の者（学ぶ者、生徒、子など）の両方の存在が前提となるわけであるが、まずこの重要なトラーを教える担い手が必要不可欠である。

トラーには前述のように多様な側面があり、祭儀的および倫理的規定に関する法的なものもある。教える者は、これらを自らよく学び、守り、トラーに仕えるほかない。教える者も、基本的には誰かから教わったことを教えるのである。したがってトラーの権威は、主なる神との契約締結に参与したモーセと結びついている。

出エジプトの民を率いたモーセは、主なる神と民との間の契約の締結に関わり、主の律法を直接授かった。偉大な預言者モーセは、主なる神と民との間の仲介者として、また民にトラーを注解して教える教育者として（特に申命記において）描かれている。モーセ自身は祭司ではないが、レビ族出身とされ（出2:1-2）、レビ人とも密接に繋がっている（出32:25-29）ことは重要である（後述）。

2) トラーの内容

ではトラーは何を教えるものなのか。ヘブライ語聖書のトラー（五書／モーセ五書：創、出、レビ、民、申）は歴史的記述や物語も多く含むが、トラーの中心は法である（英語でトラーは **Law**）。トラーの法の中でも最たるものは十戒であり、⁵⁾ トラーは、シナイ（ホレブ）契約と密接に結びついている。トラーが「教え」ではなく「律法」と訳された理由は、この契約の基盤が法であるゆえである。この主と民との間の契約関係（法的契約）に基づくゆえに、トラーはあくまでも「法」なのであり、しかしその法の内容と運用は、民に広く周知させる必要がある（法の伝授、あるいは教育）。

律法は、キリスト教ではしばしば福音と対立させ、守らなければならない戒律（束縛）と捉えられ、律法主義と結びつけて考えられやすいかもしれない。しかし、トラー（律法）こそ本来、民が主なる神から授かった良い賜物、福音であるのであって、律法遵守をふりかざし排他的にふるまう律法主義（者）

とは明確に区別されなければならない。この点は、新約聖書において、イエスご自身が律法に忠実であり、律法主義者たちを鋭く非難した（マルコ2:23-28, 7:8-13, マタイ12:1-8, ルカ6:1-5, ほか）ことから明らかである。⁶⁾

さらにこのトーラーの内容をみていこう。

トーラー（モーセ五書）は、モーセに特別に啓示された神の意志の啓示を記したものである。この点こそが、五書を他の書目、預言書からも区別し、それらに対する優位性を保証した。⁷⁾

しかし、「律法」の性質は単純に定義できない。具体的に「掟」「法」「定め」などと言い換えられている。この場合、「律法」（トーラー／女性名詞）は単数で表されるのに対し、それらはほとんど複数形で表され、⁸⁾ 個々に数えられる具体的なものを示し、それらすべてが契約の内容を形づくっている。したがって、律法／トーラーは、それら全てをまとめた総称とも捉えられる。

以上のようにトーラーにおける契約の基盤は法であり、契約である法を形づく内容が具体的に個々に示されるのであるが、この法の中心は「十戒」に集約されるだろう。

「十戒」・「主の祈り」・「使徒信条」は、キリスト教の教会の三要文と言われる。⁹⁾ ここでは詳述しないが、「十戒」は信仰の基本であり、教会の信仰に不可欠なものと位置づけられている。しかし実際、教会における礼拝の中や学びの場において、「十戒」は、「主の祈り」・「使徒信条」と同じように扱われ学ばれているかという、そうとは言えない現状があるのではないかと。教会が「十戒」を重んじることは大事である。

3) 出エジプト記と申命記における教育的要素

a 出エジプト記と祭儀規定

法の中心である「十戒」を含む出エジプト記と申命記には、とくに教育的要素の強い箇所がある。以下の例において、共同体の子どもたちに対して、祭儀の規定についてそのやり方、その理由、またそれにまつわる救いの物語をこのように伝えなさいという文言が記されている（傍線筆者）。

・過越祭の規定

「子どもたちが、『この儀式の意味は何ですか』と尋ねるときは、こう言いなさい。『それは主の過越のいけにえである。主がエジプトの地で、エジプト人を打たれたとき、イスラエルの人々の家を過ぎ越され、私たちの家を救われた。それで、民はひざまずき、ひれ伏すのである。』」

(出12：26-27)

・除酵祭の規定

「あなたは今日、息子たちに、『これは、私がエジプトを出るとき、主が私にしてくださったことによるのだ』と伝えなければならない。あなたは、この言葉を自分の手に付けてしるしとし、また、額に付けて記念としなさい。それは主の律法があなたの口にあるためであり、主が力強い手によって、あなたをエジプトから導き出されたからである」 (出13：8-10)

・主に献げる初子の規定

「将来、あなたの子が、『これはどういうことですか』とあなたに尋ねるときはこう答えなさい。『主は力強い手によって私たちをエジプトの地、奴隷の家から導き出してくださった。・・・ファラオがかたくなになり、私たちが去らせないようにしたとき、主は、人の初子から家畜の初子まで、エジプトの地のすべての初子を殺された。それゆえ私は、初めに胎を開く雄をすべて主にいけにえとして献げ、また、自分の初子である息子をすべて贖うのである。』あなたはこの言葉を手に付けてしるしとし、額に付けて紀章としなさい。主は力強い手によって私たちをエジプトから導き出されたのである。』

(出13：14-16)

以上の例は、各の祭儀規定の内容と意味が、主による救いの物語と組み合わせられて言葉として語られるだけでなく、具体的に自分の身ぶり・行為をもって、または手に付けるしるし נִסִּים、額に付ける記念 זִכָּרוֹן / 紀章 טוֹטֵפֶת の中

に納めて、これらの内容を受け入れたことを表明するようにと教えられている。口、耳、目、また肌感覚といった身体性をもってそれはなされる。

かくして信仰教育とトーラーへの応答が子どもたちに伝授されるのである。将来何世代にもわたって語り継がれるべき内容と教育方針がここに明記されていると言えよう。

b 申命記における説教的勧告

申命記においても同様である。申命記4章以降のモーセの勧告は、トーラーの中でも、とくに教育的要素が強いテキストと言える。

申命記4：1

「イスラエルよ。今、私が教える掟と法を忠実に言いなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、あなたたちの先祖の神、主が与えられる土地に入って、それを得ることができるであろう」。

申命記は、40年間の荒れ野の旅を終えたイスラエルの民が約束のカナンの土地に入る直前のある日、モーセが、モアブの地で出エジプトの第二世代に向かって律法を説き明かした文書である（申1:1-5）。トーラーに背いたために荒れ野でほぼ死に絶えた第一世代を思い起こしながら、目の前の第二世代に向けて遺言説教の形でトーラーを繰り返し語るのである。「申命記」の名称には「申ねて（かさねて）命じる文書」という意味があり、この書自体が繰り返し語る要素を強く持っている。しかも申命記は、申命記を指して「この律法／トーラー」や「この律法／トーラーの書」と呼ぶのである。¹⁰⁾

しかし内容としては、第二世代のみならず、第二世代以降のあらゆる世代に向けた教えの具体的内容と要求を帯びてくる。申命記6章の「シェマー（聞け）」の章句に典型的に示される。

申命記6：4-9

⁴聞け、イスラエルよ、私たちの神、主は唯一の主である。⁵心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。⁶今日私が命じるこれらの言葉を心に留めなさい。

⁷そして、あなたの子どもたちに繰り返し告げなさい。家に座しているときも、道を歩いているときも、起きているときも、寝ているときも起きているときも唱えなさい。⁸その言葉をしるし תִּקַּחとして手に結び、紀章 תָּבֻטִּיםとして額に付け、⁹また家の入り口の柱と町の門に書き記しなさい。

ここではまず、主を愛することと主の言葉を十全に守ることがイコールであると教えられる（4-6節）。その上でそうするための具体的な生活のあり方と教育のしかたを徹底して伝えている（7-8節）。また、前述した出エジプト記の場合と同様に、主の教え／命令の言葉を記したしるし・紀章を各人が身に付けることに加えて、家族および共同体全体が神の言葉を想起できるように家と町の入り口にも主の言葉の記載が命ぜられている（8節後半）。

こうした教えや命令がなされる理由は何か。それは直前の申命記6：3に端的に明言されている。

申命記6:3a (私訳)

「イスラエルよ、あなたは聞け、そしてそれを守り行え。それはあなたにとって良い」

下線部分のMT本文は וְיָטַב לָּךְ である。「そうすれば (=聞き守り行うなら)、あなたは幸せになり」(聖書協会共同訳)、「そうすれば、あなたは幸いを得」(新共同訳)、などと訳される箇所である。

いずれにせよ、טָב(√טַב; Qal impf.3ms)の語根טַבは、「良い/美しい/幸いだ」というような望ましい状態になることを意味する。これは創造の完成時に主が言われた言葉「それは極めて良い טָב」(創1:31)と根源的に結びついて

いる。すなわち、人間および全被造物が主によって祝福された原始の状態に近づくということである。それはトーラーを聞き、守り行うことで回復されるのである。人はそうあるようにと主が願っておられる。

c 申命記の「祝福と呪い」の教育的効果

以上のように、トーラーに聞き、これを守り行うことは、人が主に在る良き生を生きることと不可分である。このことがモーセを通して語られる申命記において、もしトーラー（神の掟、命令、戒め）に忠実であれば幸いがもたらされ、不忠実であれば災い（不幸）が訪れるという図式が、申命記28章以下の「祝福と呪い」に示されていることが注目される。¹¹⁾ そこで具体的に取り上げられるのは、子孫、土地の実り、家畜について、また外敵や病などからの守りについて、などであるが、これらは主が与えられる土地における幸いな生活と直接結びつくものである。

「もしあなたがあなたの神、主の声に必ず聞き従い、今日私が命じるすべての戒めを守り行うならば」（申28：1）、それらの上に祝福があるとされる。そのあとで、「しかし、もしあなたがあなたの神、主の声に聞き従わず、私があるあなたに今日命じる戒めと掟のすべてを守り行わないならば、これらすべての呪いがあなたに臨み、あなたに及ぶ」（申28：15）として、あらゆる災い、恐怖、凶作、滅び、病、死などが語られるのである。

ここでは、祝福を得るか呪いを受けるか、命か滅びか、は、その人の態度・行動にかかっているということが強烈に示される。これは、因果応報的であると同時に、それ以上に多分に教育的意味合いを帯びていると考えられる。特に呪いの部分から受ける恐怖感が人を脅えさせ抑止的効果をもたらす。恐ろしい呪い（災い）や滅びを身に受けないうために、自分はどうか行動すべきかを、聞く者はここから学び、選択できるよう自然と導かれるからである。モアブ契約の申命記30章にも同様の内容が示される。

申命記を通して、モーセはまさに、トーラーの律法の教師であり説教者である。神と民を仲介し、教えを注解する。ひとえに民が主なる神を畏れ、その言

葉に聞き従うようになるためである。

d 物語の効用

さらに、トーラーに含まれる語りや物語について考えたい。トーラー（律法）には、「十戒」をはじめとするさまざまな法典集、規則、細則の記述箇所がある。その一方で、創造物語、洪水物語や、イスラエルの族長物語、出エジプトの物語など、主の民の歴史に関わるエピソードや物語部分が満載である。トーラーの中心は前述したとおり法であるが、トーラーは単なる個々の法、掟、定め、羅列ではないという点が特徴でもある。

おそらく、こうした語りや物語の部分は、直接的であるとは限らないものの、中心である法を、より興味深く柔らかく読者に印象づけることに貢献しているのではないだろうか。そういう意味で、語りの部分にも教育的要素が多少含まれていると言える。

同様のことは、旧約聖書の三区分のうちのトーラーにつづく、預言者、とりわけ前の預言者（ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記）および諸書の各文書についても言えるであろう。

e 神の賜物としてのトーラー

主なる神と民イスラエルの間で交わされた祝福の契約の中身として、約束された目に見える具体的なものは、子孫の繁栄、土地の授与が挙げられる。しかし、実はそれらはご褒美（景品）的な報いの具体的なものであって、おそらく背後にある根源なものとしてのトーラー（律法／教え）そのものが、本来の神からの最大の授与であると言ってよいのではないだろうか。

土地や子孫と並んで、いやそれ以上に、この民から永遠に奪われないもの、どんな時代でも民と神とを分かち難く結びつけているものは、トーラーそのものであると考えられるのである。

したがって、このトーラーを守る民は、ただそのことにおいて、諸国民から区別される確固たるアイデンティティーを有するのである。神の民、聖なる国

民として、(たとえ離散の民でも)、トーラーが彼らを特別なものとして支えるようになる。神と民の強固な絆となる。

創世記において、主はアブラムを見出して、まずこう言われた。

「私はあなたを大いなる国民として、祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福の基となる。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなたを呪う人を私は呪う。地上のすべての氏族はあなたによって祝福される」

(創12：2-3)

この章句と、実によく響きあうのが、以下の申命記の章句である。

「見よ、私はあなたがたに掟と法を、私の神、主が命じられたとおりに教える。…あなたがたはそれを守り行わなければならない。それはもろもろの民が目にする知恵と分別であり、彼らはこれらすべての掟を聞き、『この大いなる国民は、知恵と分別の民にほかならない』と言うであろう。私たちの神、主は、私たちがいつ呼びかけても近くにいてくださる。このような神を持つ大いなる国民が、果たしてほかにいるだろうか。また、今日、あなたがたに与えるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民が、ほかにあるだろうか」。

(申4:5-8)

ここにトーラーを有し守り従うことにおいて、イスラエルの民は、諸国民の模範たる最も祝福された「大いなる国民」בְּרַחֵם יִשְׂרָאֵלとなりうることが明言されている。この祝福と励ましがトーラー教育のエンジンとなるのである。

歴史的に、イスラエルとユダの王国が崩壊し、国土を失い民が分断されてもトーラーの存在意義は残った。主のトーラーは「彼らの胸の中に授け、彼らの心へ書き記す」(エレ31:33) ものとして民の中に／中心に刻みつけられる。

したがって、トーラーを教えることは、教える人材と教わる対象者がいて、

両者が出会う環境（教育の現場）があればいつでもどこでも可能なのである。どんな時代でも、どこの国や地域でも、家庭でも学校でも会堂（シナゴグ）でも、あるいはそれらの外でも、主の言葉／トラーを伝える教育はできうということである。教会における信仰教育やキリスト教の伝道についても、同じことが言えよう。¹²⁾

2. 知恵と知恵文学をめぐる

ここまで、本セミナーの主題に関して、トラー（律法）の教育的内容とその意義をみてきた。次に旧約聖書における、知恵的文書あるいは知恵文学と言われるものについて、考察してゆきたい。

旧約の知恵文学の範囲を定めるのは困難であるが、正典の中で伝統的に知恵文学とされているのは、箴言、コヘレトの言葉、ヨブ記である。ギリシャ語版70人訳聖書（LXX／旧約続編）では、知恵の書（ソロモンの知恵）、およびシラ書（ベン・シラの手紙／〔集会の手紙〕）が知恵文学である。

ほかに詩編の一部¹³⁾ や雅歌¹⁴⁾ を知恵文学に含める見方も存在する。

1) 知恵とは何か

しかし、知恵という要素は、何もこれら一部の旧約文書にのみ見られるわけではない。むしろ知恵的な記述は旧約の至るところに散りばめられている。前掲した申命記4:5-8にも知恵の言及があった。また知恵という概念自体、曖昧である。

さらに近代の研究で明らかにされたように、知恵は古代エジプトやメソポタミア諸民族に広く見られ、イスラエルはこれらの影響を受けたのである。¹⁵⁾ 知恵は、一般的に世界および自然の秩序に関心を持ち、経験的認識や知的認識を特色とする。「知恵はオリエント共通の一現象、文化財」であった。¹⁶⁾ しかし、イスラエルはこうした周辺諸国における現象と財を取り入れながら、彼らの世界の法則の捉え方、秩序に基づく世俗的な経験知、賢明な見識や英知を

重んじるあり方を、主なる神への信仰の入り口として捉え直すことをしてきたのではないだろうかと考えらえる。

基本的に、旧約聖書における知恵とは、主なる神を信じること（すなわちトーラーを正しく守ること）と密接に結びついている。反対に、知恵の欠如（＝愚かさ）とは、神の言葉を信じない（トーラーを無視する）あり方を指す。旧約聖書の様々な物語中の登場人物の対照によってもこのことは豊かに語られているが、特に箴言は、この原則と対照を端的に表現した知恵文学である。箴言に特徴的なこのスタイルは、前述した「祝福と呪い」の対比と同じように教育的な意味合いが濃い。

旧約聖書はそのような語り全般を通して、世界の自然秩序を保持しておられる主なる神への信仰を、読者に教え育成していると言える。

2) 知恵の存在と役割

箴言においては、知恵は主なる神の創造の御業の中で特殊な役割を与えられている。すなわち、

主はこの世界と人間を創造された。¹⁷⁾ その創造において、主は知恵によって世界の基礎を形作られた。¹⁸⁾ 興味深いことに、箴言8:22-31において、知恵（ホクマー חֵכֶּמָה 女性名詞）は女性的存在として擬人化され、この世界の創造の仲介者として表現される。但し、知恵は神に創造された存在として理解されている（箴8:22「主はその道の初めに私を造った。いにしへの御業の始まりとして」）。¹⁹⁾ 知恵文学においては、箴言に見られるような創造における知恵の役割が、その後様々な形で展開されていくことになる。

イスラエルの伝統は、このように知恵を主による創造と結びつけて理解していきながら、なおかつ、神への愛と隣人愛の倫理を説いてゆく。こうした倫理的な主題は、必ずしも明言されてはいないが、知恵文学における個々の格言や書物全体の構造において認識されうる重要テーマである。

3) 「主への畏れ」と知恵の関係

箴言 1:7 「主を畏れることは知識の初め。無知な者は知恵も論しも侮る」

9:10 「主を畏れることは知恵の初め。聖なる方を知ることが分別」

これらは、箴言の区分の中で比較的新しいとされる箴言1-9章の枠をなしている。この主を畏れることの勧め／命令は、ほかに箴言2:5、3:7、15:33および31:30「主を畏れる女こそたたえられる」（新共同訳）にも見られ、「主を畏れること」יִרְאָת ה'は箴言全体の最重要テーマであると目される。

そして知恵は、主への畏れと密接に関わるものとして提示されている。主を畏れることが知恵（の初め）であることは、詩編111:10、ヨブ記28:28にも言明されている。

フォン・ラートは「主への畏れは知恵の前提条件であり、人を知恵へと育て上げる」²⁰⁾ とするが、主を畏れることとは、そもそもどういうことであろうか。まずは、主がどういう存在であるかを知らなければ、主を畏れることも生じ得ないだろう。主がどのような方であるかを知り、自分とどういう関わりがあるかを悟らされて初めて畏れは生じうる。

畏れとは恐怖や畏敬の心持ちをいい、その対象の前では謹慎、謙遜、尊敬、感謝の気持ちなどが起こる。主を「畏れる」の反対は「侮る・軽んじる」となり背信につながる。この畏れの対象である主をよく知ることがあらゆる角度から求められる。主を「知ること」に関しては、「知識」「英知」「理解」「悟り」など様々な言葉が用いられている。本来、感情の領域である「主への畏れ」に至るためには、知的理解の領域の助けが必要不可欠である。それは一般的には世界の法則、自然や社会の秩序、経験知などであり、イスラエルの宗教においてはトラーについて知ることが第一義的である。こうした知的理解の領域が、包括的な意味で知恵と呼ばれていると捉えることができよう。

しかし、旧約聖書において、人が知恵を得ることは決して最終目的ではない。「主を畏れる」ために、「主を知る」知恵を得たならば、さらにその知恵は「主を愛する」ために生かされなければならない。同時に、隣人を愛すること

へと向けられなければならない。これが宗教教育の目標であろう。

4) 箴言における知恵的教育

知恵文書の中で、知恵とトーラー教育がまっすぐに結びついている文書が箴言である。箴言に特徴的な、父が「子よ」と呼びかける形は、教師が生徒に対する呼びかけとも受け取れる。

箴言の内容は、若者に対する処世術や人生訓のようなものもあるが、基盤はトーラーを守ることにつながる主を畏れる知恵を求める生の重要性を説いていることが、以下の箇所にも明示されている。

箴言 2:1-6 私訳²¹⁾

¹わが子よ、あなたが私の言葉と戒めを受け取り、己の内に大切にすなら、

²あなたの耳を知恵へと聴き入らせ、あなたの心を英知に向かわせるなら、

³もし、あなたが理解を叫び求め あなたの声を英知に向かって上げるなら、

⁴銀を探すように、隠された宝を尋ねるようにあなたがそれを求めるなら、

⁵あなたは、主を畏れることを理解し、神を知ることを見出すだろう。

⁶なぜなら、主こそが知恵を与える方。知識と英知は主のみ口から出る。

ここでは、6節において「知恵」חֵכְמָה は主から授けられるもので、「知識」דַעַת も、「英知 (= 悟ること) 」תְבוּנָה も、主の口 (すなわち主の御言葉 = トーラー תוֹרָה) から出るといふ真理が明かされる。これらの言葉、および3節の「理解」בִּינָה はいずれもヘブライ語で女性名詞単数である。主語の「あなた」(男性単数) は、自分の心や耳や声を存分に用いて、それら女性名詞単数で表現されているものに向かい、聞き、求め、受け入れるようにと教えられているのである。

冒頭1節の「私の言葉と戒め」は主のトーラーを意味していると言ってよい。これをまず自ら「受け取り」√לָקַח、「大切にす」√פָּנַח ことが前提とされている。そして、4節では、「探す」√בָּקַשׁ、「尋ねる」√חָפֵּשׂ、「見

出す」√*נִצַּח*といった能動詞が並べられ、最終的に神を知ることに至る。まさに「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる」(マタイ7:7)！

さらに言えば、1節の「大切にする」√*יָרַץ*の原義は「隠す」であり、5節の「見出す」と対をなしていると見られる。言葉と戒め(＝トラー)を自分の内に隠すように大切にしている人は、主を無視せず、受け入れている。その人が、さらに知恵を宝物のように探し求めるなら、その働きに助けられて、その人は、主への畏れを深く理解し、神を知るようになる。それこそが宝探し、人生において見出すべきものなのだ。

主を知ることと知恵を求めることは同じような経過をとるが、あくまで知恵は、主から授けられるものであり、主を知ることへ到達するために人が探し求めるべきものとして提示されるのである。知恵のそのような働きが、旧約聖書における知恵の役割である。

したがって、知恵の獲得や、知識の豊富さが重要なのではない。折角の知恵や知識も悪用すれば神から遠ざかってしまう。あらゆる知恵、知識・英知・知的理解を主に向かうように働かせることが重要である。現代世界においては、発展する科学技術的知見や人工知能などの「知恵」をどう活用するかもつねに問われる(cf.ヤコブ書3:13以下)。

5) 神の知恵、人間の知恵

a 知恵についての言明

知恵は神から来るという言明は、箴言以外では、以下のようなものである。

・ソロモンは、主に願って知恵を神から与えられたことが列王記上3章に明言される。そこでは、「訴えを聞き分ける分別」(王上3:10)、「知恵に満ちた聡明な心」(同11節)、「裁きを行う神の知恵」(同28節)などと記される。

・ヨブ記では、神は全能者である(ヨブ40:2)とまことに知ることが、最終的に、ヨブに神への畏れと謙遜の心を起こさせた(ヨブ42:1-6)。

・LXX／続編の「知恵の書」における知恵の言及：

「知恵は神の知識の秘密にあずかり、神の業を選び取る」(知恵の書 8:4)

「神が与えてくださるのでなければ、知恵を得ることはできない」(同 8:21)

・創世記のエデンの園における描写：園の中央に生える「命の木と善悪の知識の木」(創2:9)、

一方で、人が「神のように善悪を知る者となる」(創3:5、22) ことへの主のためらい。

このように、旧約聖書においては、知恵は神から来ることは確かで、知恵は探求するものと提示されるが、人が知恵を得ることについてはどこか制限的なイメージが伴う。

b 知恵の限界

しかし、実際の人生においては、一般に知恵と総称されうる、世界の法則、自然秩序、社会の経験則、格言的真理の洞察、また個人の行為が相応の結果に結びつく因果応報の原則、といったものが通用しないことがある。不慮不可知の事柄、理不尽な出来事が生じる。悪が蔓延り善人が苦しむ。

このような知恵の限界とも見える現実問題に人はどう向き合えばよいのか。

旧約の知恵文学であるヨブ記、コヘレトの言葉はこの難問に正面から取り組んでいる。登場人物の内なる言葉の吐露や様々や議論を通して、最終的に、人間的知恵を総動員しても越えられない、神の知恵とも言う神の支配領域があることを、読者は登場人物の苦悩と共に見出すように導かれるのである(ヨブ42:1-6、コヘ2:24,26, 3:10-11,13-15,17-18, 5:1-6,17-19, 6:2, 7:13-14, 29, 8:12-13,17,9:1,7,9 11:5,9,12:1,7 など)。これらは、己の知恵や規則で太刀打ちできない現実に直面したところで、まことに人生の主である神の知恵を捜し求めるよう人を導く人の言葉である。

こうした、人間の知恵の有限と、神の知恵の無限とを知ることを人の言葉を通して教えることもまた、イスラエルの神学的教育の射程の中にある営みであ

ると言えよう。

もちろん、だからといって、人間は知を求める行動努力をはじめから放棄してはならない。フォン・ラートは、「あらゆる人間の営みには神秘的な神の臨在があり」、「神が人と共に歩まれること、一方で人間の計画を制限しながら、他方では人が定めた目標のかなたへと連れ出しながら・・・こうして人間の限界を経験するように・・・、これこそ究極的には慰めに満ちた教えであった」²²⁾と述べる。

c ソロモンの知恵と罪

イスラエルの王ソロモンは、神からの知恵を豊かに受けた王として知られ、箴言、コヘレト書、雅歌の各表題にその名が掲げられている。そのソロモンは神殿を建築し、平和と安定、繁栄の黄金時代を築いた。ソロモンは知恵に満ちた人として描かれる。しかし一方で、ソロモンは多くの外国人の妻を娶って、外国の神に心を奪われるという、律法に違反することをを行い、主に背いた（王上11：1-10）。それゆえ王国は南北に分裂することが決定づけられたとされる（王上11：11）。

ここで、かくも知恵に満ちたソロモンが、なぜ主に罪を犯すのかという素朴な疑問が生じる。知恵があることと、トラーを守り主に従うことは、同じではないのか。知恵があっても背信行為をしないと限らないのなら、そこに矛盾を感じざるを得ない。それこそ知恵の限界ではないか。

この問題は、おそらく旧約聖書の中では解決されていない。そしてこのことは、現実を見れば知的水準の高い人や指導的立場にいる人などが、倫理的な罪を犯すことと決して無縁ではない、という事実をも浮き上がらせるのである。

ここまで、知恵は「主を知る」ことへと人を導く働きをすることを見てきた。しかし、さらにその先があるのではないかと考えさせられる。たとえば律法について「無知である」ことと、「無関心である」こととは別物である。人は何かを知っていても自分には関係ないと思えばそれまでだ。その隙間を埋めて、心を関わせる、好きになるまで高められることが必要なのであろう。つま

り「主を知る」ことから、「主を信頼する」「主を愛する」ことへの昇華である。おそらくその過程において、良い導き手たる人の存在が欠かせない。それが教師の役割と存在意義なのではないか。

3. 知者の存在と働きをめぐって

ではいかにして知者は、主に信頼し、主を愛することを教える存在たりえるか。これを最後に考察したい。ここで、知者とは、知的な人、知識人というだけでなく、知らせる人、つまり教える人／教師という側面も併せ持つ存在とみなすこととする。旧約聖書に見え隠れする、さまざまな知者のあり方を取り上げながら、最終的にトーラーの教育者、主の担い手の像に迫ってゆきたい。

1) 様々な知者、指導者、教師

a 宮廷と知者、賢者、書記

古代オリエントにおいて、知者、賢者はその国の君主／王や宮廷と深く結びつき、重んじられていたと考えられる。彼らはしばしば、呪術師、魔術師などとも呼ばれる（創41:8、出7:11、ダニ2:2以下；cf. マタイ2:1以下）。ほかに王の相談相手としての知者の存在を伝える箇所もある（エス1:13、エレ10:3など）。彼らは、賢明な政治的判断を促す、文字による記録を残すといった役割を担った。

イスラエルにおいても、知恵が伝統的に養成された場はおそらく宮廷であった。²³⁾ 特に、平和で国際的外交と宮廷文化が栄えたソロモン王の時代以降、政治的機構も整えられ始め、王に仕える役人や書記には高い教養が必要とされるようになったであろう（箴言25章はユダのヒゼキヤ王の下にある人々の手による編纂であることが明記されている）。王たる者は、武力・軍事力に強いだけでなく、明瞭で賢い王であることが求められるからである。

b 学校制度と教師

では、学校のような場所はいつ頃からあったのだろうか。旧約聖書で「学校」にあたる言葉は見当たらない。前2世紀後半のベン・シラの書51:23に「学び舎」בֵּית הַמְּדוּרָה とあるくらいだが、イスラエルにおいては、王国時代初期から、学校制度があっただろうとの推測もある。²⁴⁾

旧約聖書では表面化していないが、次第に知恵の教師、トーラーの教師、ユダヤ教のラビ、律法学者などと呼ばれる人々が存在し、家庭や学校、聖所、会堂などで子どもの教育や民の宗教的指導にあたったと考えられる。そこでは文字の読み書きから、聖書（巻物）の朗読、律法の解き明かしなどが行われ、その繰り返しの中で、神の民としての自己認識が育てられたであろう。

文字／言葉の教育は特に重要である。パルシャ時代以降、パルシャ帝国の公用語のアラム語がユダヤ人の日常言語であったが、祈りと礼拝はヘブライ語でなされた。教育のある者はヘブライ語を理解していたが、会堂での礼拝でヘブライ語聖書が朗読されるときは、通訳がアラム語で意味を説明することが多かったという。²⁵⁾

c レビ人、祭司

ヨシヤ王の宗教改革によるエルサレム神殿での礼拝集中化によって、神殿に仕える祭司やレビ人（申命記はレビ人祭司と呼ぶ）も、民に指導する職務となっていったであろう。主に聖所での祭儀全般に携わる祭司に比べ、レビ人は古来より各地に散在し（申18章、ヨシュ 21章ほか）、地方の農民や貧しい人々に寄り添いつつ、主の担い手としての地味な働きをなし続けていた存在が注目される。レビ族出身のモーセとの関係も深く（出32:25-29）、十戒の石の板を納めた「神の箱」（「主の契約の箱」）を担ぐのはレビ人の役割であった（ヨシュ 3:3など）。レビ人はイスラエルの初子として聖別され、主のものとされた（民8:5以下）。レビ人はそのような存在として、神と民のための務めを担い続けたのである。²⁶⁾ レビ人は神殿における詠唱者、音楽の演奏面にも参与していた。また、近年の研究によって、詩編や歴代誌の編纂にレビ人が関わった

可能性が指摘されている。

レビ人は、まさしく主の担い手として、神殿に仕えながらトーラー教育や聖書編纂にも参与した。そのあり方や職務は、教会の牧会者（牧師・教師）に通じるものがある。

d 羊飼い

羊飼い（牧者）のイメージは様々ある。イスラエルにおいては、家畜遊牧民であった父祖たちに因む伝統的な職務である。ノア、アブラハム、ヤコブ、モーセ、そしてダビデも羊の世話をした。羊の群れにたとえられる主の民を懇ろに養い、保護し、良く導く牧者は、イスラエルの王的存在として示され（エゼ34章、ゼカ11章など）、主なる神ご自身のイメージともなる（詩23）。

実際の羊飼いの人々は、農民らからは距離を置かれることはあったが、知者として尊敬もされていたという。その土地のことをよく知り、そこで生きる多くの羊たちが迷わないように導き、たえず気を配る羊飼いの職務とその謙遜な姿は、教会の牧者と重なるものである。

2) 知者の役割、教育の目的

以上のように、さまざまな知者（教育者）の存在を見てきたが、共通するのは、主の担い手として民のためのトーラー教育や、信仰の養いの働きをすることである。

聖書の中に明言されてはいないが、そこでは、知者は、相手に繰り返しトーラーを語りきかせ、その意味や物語を熱心に伝え、知的興味をかき立てながら、それぞれのしかたで主を知らせていたのであろう。そして、主に信頼し、主を愛している己の生を相手に伝えていたのであろう。

名前を呼び、呼びかけ、共に過ごし、忍耐強く、喜びをもって主を伝える。主の教えを、神の愛を何度も繰り返し、知恵を用い、心を尽くして、愛をもって、語り聞かせるのである。——それをじかに受け取ることによって、人は自ずと、主を知ることから始まって、主を信じ愛することへと導かれるのである

う。そこには祈りと献身があるだろう。その師弟の間には、きっと尊敬と愛情、互いの信頼が生まれている。

おわりに

われわれが主の担い手として働く場合、教える対象者によって以下のようなあろう。

- ①主を全く知らない人、トラーに初めて接する人（子ども、異邦人、他）に新しく教える
- ②主を知る人／信仰者に対して、主の道を歩み続けるように、継続してトラーを教え導く

教会は、特に①のケースを伝道と捉え、受洗者教育のようなプログラムや教会学校（日曜学校）を設けて対応し、②に対しては、礼拝の説教が中心で、ほかに聖書研究会、祈祷会、研修会といった集会を実際の教育の現場にしていると言えよう。ただ実際は、①と②の両者混在の中で福音を宣べ伝えることが多いだろう。

いずれの場合でも、そこで教える側（教師）にとって重要なのは、語りかけ、注意を引き、解き明かし、繰り返し教え、愛をもって導くことである。主の教え（トラー）に従い正しく生きる者となるように忍耐強く導き、ときに矯正しながら。幸いとは何か、人生の喜びとは何か。それは神と共に生きることであると、これを実践しつつ、繰り返し教え、未来に伝えることが、牧師・教師の使命と喜びであるに違いない。

（みやざき・かおる）

注

- 1) 本稿は、2025年1月7～9日に代々木オリンピックセンターで開催された教職セミナーのシンポジウムⅢにおける筆者の発題に若干手を加えたものである。

- 2) 箴言6:20「子よ、父の戒めを守れ。母の教え（トラー）をおろそかにするな」（筆者による注）
- 3) F・クリュゼマン、U・タイスマン著、大住雄一訳『キリスト教とユダヤ教』教文館、2000年、171-2頁。
- 4) 同上、172頁。
- 5) イスラエルの民と主なる神との契約の象徴として、「神の箱」（「契約の箱」、「主の箱」）がある。その「箱の中には二枚の石の板のほか何もなかった」（王上8:9）。すなわち出エジプト時のシナイ（ホレブ）契約の中心は石の板二枚に刻まれた主の十の言葉（十戒）であり、十戒が最重要で、不可欠な神の律法（法、定め、掟）の内容であると言える。
- 6) さらに、主イエスは山上の説教の場面で、「私が来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。よく言っておく。天地が消えうせ、すべてが実現するまでは、律法から一点一画も消えうせることはない」（マタイ5:17-19）と語り、神の戒め（トラー）を守るよう、民全体に教えている。
- 7) 大住雄一『新版 総説 旧約聖書』（池田、大島、樋口、山我監修）、日本キリスト教団出版局、2007年、97頁。
- 8) 「掟」「定め」**חֻקִּים** statutes、「定め」「法」**מִשְׁפָּטִים** judgements, ordinances、「戒め」「命令」**מִצְוָה** commandments、「証し」**עֵדוּת** testimonies（申6:20）など。
- 9) 三要文の学びについては、説教黙想アレテイア叢書『三要文 深読 十戒・主の祈り／使徒信条』（日本キリスト教団出版局、2023年、2巻本）を参照されたい。
- 10) 申命記 1:5, 4:8,44, 17:11,18,19, 27:3,8,26, 28:58,61, 29:21,29, 30:10, 31:9,11,12,24,26, 32:46など。
- 11) この申命記28章以下の「祝福と呪い」のような部分は、申命記の成立過程においては遅い時期に編集されたと考えられている。おそらくバルシア時代以降であろう。だとすると、善悪二元論を基本とするバルシア帝国の宗教ゾロアスター教の影響を受けている可能性が高いと筆者は考える。バルシア帝国とゾロアスター教についての概観は、拙論「エステル記における重層的構造」、『神学』75号、2013年、340-2頁を参照されたい。
- 12) キリストの伝道者フィリポとエチオピアの高官とのやりとりは、走る馬車の中でなされた（使徒8:26-40）。フィリポが走り寄り「読んでいることが分かるか」と問いかけ、高官が、イザヤ書の朗読を聞いただけでは分からない、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かるでしょう」と答えたのがきっかけで、

フィリポは福音を告げ、高官は洗礼を受けた。

- 13) 知恵的な詩編として、1,32,34,37,49,73,91,112,119,127,128,133,139編などをさすことがある。律法の主題、因果法的観念などや、アルファベット歌の形式を含む。ただし、知恵の詩編という確立されたジャンルがあるわけではない。
- 14) 小友聡『謎解きの知恵文学——旧約聖書・「雅歌」に学ぶ』ヨベル新書、2021年を参照せよ。
- 15) 例として、箴言22:17—24:22（知恵ある人の言葉(1)）は古代エジプトの知恵の書「アメン・エム・オペト」に依拠していることが確実視されている。
- 16) G.フォン・ラート著、勝村弘也訳『イスラエルの知恵』日本基督教団出版局、1988年、26頁。
- 17) 箴言8:22-3、および箴言14:3,17:5,20:12,22:2,29:13など。
- 18) 「主は知恵によって地の基を据え 英知によって天を定められた」（箴3:19）。
- 19) このような、知恵は創造に先立って創られ、世界全ての規範として存在し続けているといった知恵の描写は、新約聖書における、ヨハネ福音書のロゴスとしてのキリスト論や、コロサイ書1:15-20、一コリ1:24-30などの描写に影響を与えたと考えられている。
- 20) フォン・ラート、前掲書、110頁。
- 21) **聖書協会共同訳** 子よ、もし私の言葉を受け入れ、私の戒めをあなたの内に納め、知恵に耳を傾け／英知に心を向けるなら／さらに分別に呼びかけ／英知に向かって声を上げ／銀を求めるといふようにそれを尋ね 隠された宝を求めるといふようにそれを探すなら／その時、あなたは主を畏れることを見極め 神の知識を見いだすだろう。／まさしく主が知恵を授け、主の口から知識と英知が出る。
新共同訳 わが子よ わたしの言葉を受け入れ、戒めを大切に／知恵に耳を傾け、英知に心を向けるなら／分別に呼びかけ、英知に向かって声をあげるなら／銀を求めるといふようにそれを尋ね 宝物を求めるといふようにそれを捜すなら／あなたは主を畏れることを悟り 神を知ることによって到達するであろう。／知恵を授けるのは主。主の口は知識と英知を与える。
- 22) フォン・ラート、前掲書、164頁。
- 23) フォン・ラート 前掲書、36頁。
- 24) 同上。
- 25) ティム・ダウリー著、結城絵美子訳『聖書の成り立ち』いのちのことば社、2014年、9頁。
- 26) レビ人の存在や職務については、拙論「旧約聖書における『レビ』および『レビ

人』について—主の担い手としての存在と働き—」『神学』83号、東京神学大学
神学会、2021年、191—224頁を参照されたい。